SEA TRIAL

THE ALL SEASON BOAT

SARGO 33

フィンランド製のボート、通称 "フィンボート" の代名詞とも言うべき「**SARGO** 」のニューモデル「**SARGO 33**」が日本に初上陸を果たした。
シングルエンジンならではのバランスの良い走りは、ボートを走らせる楽しみを改めて感じさせてくれる。
北欧スタイルの遊び方、海を一年中楽しめるであろう魅力を満載。
シングル400馬力、インアウト仕様の「**SARGO 33**」を横浜沖で試した。

text: Atsushi Nomura　photo: Makoto Yamada
special thanks: OKAZAKI YACHTS　http://okazaki.yachts.co.jp

PB2018.05_P068-074.indd 68-69　2018/03/26 16:44

過酷な北の海で生まれた北欧スタイルの“THE ALLSEASON BOAT”
驚くほど軽快、そして楽しませてくれるパフォーマンスは見事としか言いようがない

1967年創業の「Sarins Boats (Sarins Båtar Oy Ab)」は、フィンランドでも有数のボートビルダーである。同社の「SARGO (サルゴ)」は、2014年まで「MINOR (ミノア)」の名前でお馴染だったプレジャーボートブランド。フロントウィンドウが立ち上がったトラディショナルな雰囲気のワークボート風デザインが特徴だ。「SARGO」のラインナップは25～36フィートのレンジに5サイズが揃う。今回試乗したのは2番目に大きな「SARGO 33」。このモデルは2016年のフィンボートショーでワールドプレミアを果たし、本誌でも同年12月号でフィンランドでのシートライアルを紹介している。このほど最新型の「SARGO 33」が日本初上陸を果たした。

*

「SARGO 33」は全長10.99m、全幅3.45mの艇体に、1基または2基のインアウトエンジンを搭載可能だ。今回のモデルはVOLVO PENTA D6-400 DP (400HP) を1基掛け。ちなみにフィンランドでのシートライアルの際には370馬力2基掛けモデルも供された。燃料タンクはシングルの場合600Lだが、ツインエンジンの場合800Lとなる。輸入元の「オカザキヨット」によると、ツインではなくシングルをチョイスした理由は走行バランスの良さに尽きるという。確かに速度性能だけみると、ツイン (300～400馬力×2基) のマックスは40ktオーバー、それに対してシングル400馬力の場合は30kt程度とずいぶんと差がある。しかしスターンヘビーになりがちなツインよりも、トータルバランス、走行姿勢は圧倒的にシングル仕様が良いという評価もある。さらに長年「オカザキヨット」が付き合いのあるドイツの「SARGO」ディーラーのアドバイスもあり、日本へ輸入する最初の「SARGO 33」はシングルエンジン仕様に決まった。

早速、その走行バランスをテストしてみるべく、横浜ベイサイドマリーナの桟橋を離れる。スラスターが装備されており、シングルでも離着岸に不安はない。さらに低速での保針性が高く、狭い水路を行き来する場合でも操舵しやすい。当日は風もほとんどない素晴らしいクルーズコンディション。シートライアルにはちょっと物足りないが……、しかしウィークデイの横浜沖、本船などの引き波で決してフラットではない海況だった。そんな中で早速スロットルを押し込んで行く。小気味良い加速感と軽快な取り回し、タイトな高速旋回もスムーズな傾きでこなす。話に聞いた以上の抜群のバランスだ。

前号 (2018年4月号) で紹介した「SARGO 31 Explorer」も、31フィー

トというサイズを感じさせない走りが印象的だったが、より大きな「SARGO 33」は、むしろそれ以上に小型のモデルをコントロールしている印象を受けた。「31」よりもトリッキーで、しかも十分コントロールできるパフォーマンス。「海を走るための乗り物」として考えると「SARGO 33」は、「31 Explorer」以上に非常に愉しい。軽快な操縦性は本当に33フィートとは思えないものだった。今回のシートライアルではマックス29.5～30.0kt。ツインや「31」よりも速度性能は劣るものの、走りの愉しさはこちらの方が格段に上だ。

*

「SARGO 33」のデッキレイアウトは、シリーズの他モデルと同様に、センターキャビンのウォークアラウンドタイプ。大きく異なるのが、センターキャビンにリアドアが設けられていることだ。もちろんキャビン両サイドのドアは健在。純粋な北欧スタイルのサイドドアオンリーも良いが、クルーザー的な遊び方を考えるとリアドアは非常に便利だ。たとえば今回は横浜ベイサイドマリーナのビジター桟橋に係留していたが、ブルワークトップが高い位置にあるため、桟橋との行き来はスイミングプラットフォーム経由となる。桟橋 → スイミングプラットフォーム → アフトコックピット → キャビンという動線を考えると、リアドアは改めて便利だと痛感する。キャプテンの動きだけ見ればサイドドアが優位だと思うが、ゲストのことを考えるとリアドアに分がある。両方備わる「SARGO 33」はそれだけ魅力的だ。

室内レイアウトは、サイドドアのみの「31」などとはかなり異なる。リアドアが右舷側にあるため、センターキャビンの左舷側にダイネッティを配置。通路を挟んだ右舷側はカウンター状で、シンクなどが配置されている。ダイネッティはもちろんベッドとしても利用可能だ。通路の最前面、右舷側にドライバーズシート、左舷側に2名掛けパッセンジャーシートが配置されている。その両舷にサイドドア。センターキャビンの窓は広く視界も素晴らしい。フロントウィンドウが逆傾斜しているため、太陽光の直視や反

無垢のチークを多用したインテリアは重厚でトラディショナルな趣。大きく解放するハードトップと明るめの配色のおかげでミニマルなモダンテイストの印象も受ける。コンソールボックスごと手前に傾斜できるヘルムステーション、肌触りの良いアルカンターラ素材のシート＆ソファ、チークのドアロックに、北欧ならではの清々しさを感じる。カウンタートップを開けると現れるギャレーは、3つ口コンロとダブルシンク。シンク横には静水タンクのゲージまで備える。落ち着いたナイトエリアも寝心地が良さそうだ。

PB2018.05_P068-074.indd 72-73 2018/03/26 16:44

前号でレポートした「31 Explorer」以上に、軽快さとパフォーマンスを備えた「SARGO 33」。桟橋に繋がれたフォルムを見るとキャビンの大きさが印象的だが、走らせると非常にコンパクト＆リニアな操作感で、熟成されたトータルバランスの高さを感じる。1基掛けの方が面白いというインポーターの声も頷ける。

射を余り気にせずに操縦できる点もポイントが高い。さらにハードトップは開閉可能。高速旋回時はヒールでドライバーズシートから左舷側の視野が狭まるが、ハードトップを全開すればまったく心配がない。ウッドが多用されたインテリアは全般に明るめの配色で、トラディショナルなデザインながらもモダンなテイストが「SARGO」らしいアレンジだ。

バウキャビンへのアクセスは、パッセンジャーシート前面のパネルドアから。シャワースペース付きの個室ヘッドとバウバースが備わる。天井部分にウィンドウハッチ、両舷にも窓があるため、バウキャビンには自然光が優しく取り入れられている。さらに、センターキャビン後部のL字型ソファを上に跳ね上げるとロアーキャビンへの階段が設けられている。ロアーキャビンは2つのシングルベッドを合わせたキングサイズベッド。バウキャビン、ロアーキャビン、センターキャビンにそれぞれ2名は泊まれる広さがあるため、4～6名程度なら余裕を持ってマリーナステイを愉しめるだろう。もちろんマリーナステイだけでなくデイクルーズ、ボートピクニック、アイランドトリップなど、「SARGO 33」は、さまざまに海を楽しみたいと思わせる魅力にあふれている。

33フィートの余裕が生み出したアフトドア。純粋な北欧スタイルはサイドドアのみだが、クルージングの使い勝手はやはりアフトドア付きには敵わない。大きく跳ね上がるウィンドウも快適。エンジンルームは2基収容できるサイズゆえ、シングル VOLVO PENTA D6 ならメンテナンスもいっそう楽だ。

*

走らせた時の楽しさと、多様なマリンレジャーの魅力、"THE ALLSEASON BOAT" という「SARGO」のキャッチコピー通り、1年を通して多彩な遊び方が想像できるボートである。バルト海最北、真冬には結氷しブリザードが吹き荒れる厳しい海……、ボスニア湾で生まれた "THE ALLSEASON BOAT"「SARGO 33」。四季を通じてさまざまな姿を見せる日本の海でも存分に楽しめ、かつ対応できるパフォーマンスを有するボートと言えるだろう。 *P.B.*

SARGO 33

全長　10.99 m
全幅　3.45 m
喫水　1.10 m
重量　6.70 ton
エンジン　1 × VOLVO PENTA D6-400 DP
最高出力　1 × 400 HP
燃料タンク　600 L
清水タンク　260 L
問い合わせ先　オカザキヨット
TEL: 西宮 0798-32-0202　横浜 045-770-0502
http://okazaki.yachts.co.jp

vimeo

PB2018.05_P068-074.indd 74-75
2018/03/26 16:44